生間流と明智光秀との関係について

2017年８月1日　河田容英

はじめに

生間流は現在でも続けられている庖丁流派のひとつである。現在の家元は 30 代目（小西将清氏）であり、萬亀楼という料理店の当主でもある。武士独自の饗応料理として発達した本膳料理は、現在でも「有職料理」として、京都の萬亀楼で賞味することが出来る。

明治 34 年に『生間流式法秘書』という、生間家に代々伝わってきた秘書が、生間流 27 代目の生間正起によって公開・発刊されている。（生間正起は、発刊年と同じ明治 34 年に亡くなった）
秘伝でありながらそれを公開した経緯として考えられるのは、それまで仕えてきた八条ノ宮家の代が途絶えてしまい仕える先が無くなった事。また生間正起にも後継者となる血縁者がおらず、その死期も迫っていた為に生間流の消滅を危惧したからではないかと推測される。

『生間流式法秘書』

生間流に伝わる有職故実をまとめた秘書は『生間流式法秘書』として全 5 巻刊行された。そこには料理における生間流の有職故実だけでなく、生間流の代々の記録も含められている。ここで生間流 16 代目の生間兼長についての記録を引用しておきたい。

【生間流式法秘書 第一巻】
三郎左衛門尉兼長

永録四年将軍義輝公三好屋形へ御成ノ節饗礼ヲ奉勤ス其後織田右府公ニ仕フ
天正十年五月安土城ニ於テ上様 信長公 三河守 徳川家康 御申シ節饗禮ヲ奉仕ス 其後豊臣秀吉公ニ仕フ

『生間流式法秘書』の記録を見ると、16 代目の生間兼長は
- 永録四年の三好氏が将軍義輝に対して行った御成
- 天正十年、五月に安土城で行われた家康への饗応

この両方で奉仕したと述べられている。

最初の永録四年の御成は、進士晴舎により料理手配が行われたことが『永禄四年三好亭御成記』に記されている。またその後の「天正十年安土城での饗応」は明智光秀が手配を行う筈であったが急遽変更

された。
　この両方で生間兼長は奉仕しているのだが、注目すべき点は、永録四年に進士晴舎の元で料理を勤めた生間金が、どういう経緯によって信長に仕え、「天正十年安土城での饗応」でも奉仕するようになったのかという事である。

庖丁人と料理人

　ここで庖丁人と料理人の違いについて触れておきたい。『生間流式法秘書 第四巻』には「庖丁人と料理人との区別の事」として以下のように述べられている。

【 生間流式法秘書 四巻 】
　庖丁人と料理人との区別の事

　庖丁人を料理人というものあり、古人も庖丁人と料理人の階級あるを知らずして刀を取り魚鳥を切るものを料理人と同一視し、これがせんさくをなさず杜撰にかかげし書あり、これによりて世人も同様に会得し者あり。これらは門外漢の知る所にあらざるゆえ、深くとが免ず。元来庖丁人は庖丁式、禮法、庖厨の規矩、塩梅の事を司り。板元、料理人の泰斗となりて教授す故に、むかしより料理人は板元に隷属し、板元は庖丁人の教えを受けて調膳の事を司るものなり。
　庖丁人のことは古より貴顕の人々これを学び、又、天道を掌どり叡覧あらせられし事は、我朝に於いて未だこれあるを聞かず、これを以て庖丁人と料理人との階級に大差ある事は火を見るよりも明らかなり。庖丁人は世に多くならざるゆえ、板元、庖丁人の事を学びてこれを兼ね、料理人は板元に学びて庖丁人の事秘をなす。これより庖丁人と料理人との階級をみだしたるゆえ門外漢の同一視するも無理ならぬ事也。
　甚だしきに至りては庖はくりやと読て台所の事也、丁は仕丁の丁の字にて、めしつかひし事也。台所のめしつかひというなどと得たわがほに云いえることのあえれども、これらは文字になづけたる牽強附會の説にて取るにたらず。庖丁と云う事は志さい秘することにて門外漢の知る所にあらず口伝。

　このように庖丁人は料理人の上におり、庖丁人が調膳を司り、料理人はそうした庖丁人の下でその指導に従うべきであることが述べられている。
　江戸時代以降になり、生間流も庖丁人としての格式を身に着けた様であるが、室町時代から戦国時代の生間家はまだ単なる料理人としての位置づけでしかなかった。その証拠として以下の 2 点を指摘しておきたい。

① その当時の御成や饗応において、生間家には料理を司る役割は与えられておらず、むしろその下で料理を行う実務を勤めていたことしか記録されていない。
② 庖丁人が行う庖丁式では「三鳥五魚」と言い、鳥は鶴・雉・雁、そして魚は鯉・鱸・真鰹・鯛・鮒だ

けが使われることになっていた。しかも魚は鯉が最上とされており、一般的に庖丁式では鯉が用いられるのが通常である。しかし、初期の生間氏は、鯉の庖丁式ではなく鮟鱇釣庖丁の披露を行っているだけである。（アンコウのようなイカモノは正式な庖丁式では用いられなかった）

よって『永禄四年三好亭御成記』に記されている御成。またその後の「天正十年の安土城での饗応」において、生間氏はその宴会を司っていた訳では無く、庖丁人としての高い身分の者の下で、単にスタッフとして調膳に勤めていたと考えるべきだろう。

進士氏と生間氏の関係

先にも述べたように、永録四年の御成は、進士晴舎が司って料理が準備されており、生間家（16 代目 生間兼長）はその下で調膳を勤めていた。よって進士晴舎と生間兼長は、この御成の為に共に事に当たることで面識はあったのではないかと考えられる。

これを踏まえて考えると、生間兼長が織田信長に仕え、天正十年に安土城で行われた家康への饗応も勤めたとある記述は興味深い。生間兼長がどのような経緯で信長に仕えるようになったか定かではないが、天正十年饗応を明智光秀が任されたことを考えると、そこに「進士氏 - 生間氏」の連携のようなものの影が見えてこないだろうか。

生間兼長は、永録八年の「永禄の変」の後、調膳・調理人として仕えていた足利家から離れることになったと考えられ、その後、織田信長に仕えるようになったようである。こうした経緯の背後には、誰か権力者（庖丁人たる者）がいて、その者が自分自身が信長に仕えるようになってゆく過程で、かつての気心の知れた料理人を引き上げて、共に信長に仕えるようになったと推測することも可能であるのかもしれない。そう考えると生間兼長がなぜ「永録四年御成」および「天正十年家康饗応」という双方の、歴史的に重要な調膳を勤めることになったのかという部分が説明できるように思われる。

進士晴舎が、「永録四年御成」を司る時にも側にいて、御成における有職故実を伝授されるような立場となるのは嫡子の進士藤延という事になるだろう。そうであれば当然、進士藤延は生間兼長とも共にその準備に携わったと考えられる。

進士藤延が「永禄の変」の際に死んでおらず、明智光秀となっていたという事であれば、永録八年以後に、明智光秀として織田信長に重用される過程のなかで、生間兼長を引っ張り、過去の実績を踏まえ経験を買われて「天正十年家康饗応」も勤めたという経緯も成り立つ可能性がある。

また織田信長も、こうした明智光秀（進士藤延）の背景を知っていたので、最適任者として明智光秀に家康の饗応を命じたと考える事もできるかもしれない。また、信長が単なる饗応ではなく、明智光秀に御成をさせようとしていたのであれば、その感はより強まるのである。御成についての有職故実を経

験として持っている家臣は、明智光秀（進士藤延）しかいないからである。こうした背景ゆえに生間兼長は、仕えるその主人を足利家から織田信長に変え、かつ「天正十年家康饗応」を勤めたのであると考えられはしないだろうか。

生間兼長と坪内

生間兼長が「天正十年家康饗応」を勤めたのは、明智光秀（進士藤延）による抜擢ではなく、生間兼長の実力の故であると考える人もあるかもしれない。つまり生間兼長が、経験からこうした料理に通じており、実力ある者としてその調膳において評価を得ていた故に、この勤めが与えられたのではないかという意見である。

こうした意見に対しては、信長の味に関する有名なエピソードである「坪内」という料理人の事を指摘しておきたい。

『常山紀談』には、かつては三好氏に仕えており囚人となっていた坪内某という料理人が、信長に仕えるに際して試に信長に料理を出したところ、「水臭くて食べられたものでない」と信長を激怒させてしまうが、翌日もう一度作り直したところ非常に美味であったので信長は坪内に褒美を取らせたことが述べられている。実は最初の料理はかつて坪内が仕えていた三好家の味付け（都風）であったが、後から出した料理は三流の味付け（田舎風）であり、これを信長は好んだとしてある。

この話が史実であったのかどうかは疑わしいが、エピソードとしては面白い話なので何らかのフィクションの要素も交えながら後世に語り伝えられたのだと思われる。それでもこのエピソードは、生間兼長の置かれた立場と比較して考えるならば、幾つかの興味深い点を発見することが出来るように思える。

まず坪内は三好氏に仕えていた料理人であるとされているが、生間兼長もまた三好氏に仕えていた料理人であった可能性も少なからずあり得る。なぜならば三好氏が行った「永録四年御成」で生間兼長は奉仕しているが、それは三好氏の料理人であったからかもしれない。しかしながら、進士晴舎がその御成を司っていたので将軍家から生間兼長を連れてきたとも考えられるので、この部分をはっきりとは断言できない。もし生間兼長が三好氏の元で仕えていたとすると、生間兼長のその立場は、坪内とまったく同じ立場であったことになるだろう。

さらに坪内は「鶴・鯉料理は言うに及ばず、七、五、三の饗膳の儀式もよく知っていた」とされている。これは坪内が料理人の中でもかなり上位に位置する、料理における有職故実に通じた、経験ある人物であったことを示している。

こうした点を考慮すると、坪内某と生間兼長の存在がかなりオーバーラップしており、同一人物の可能性さえ感じさせられるが、ここはひとまず、生間兼長は足利家に仕えており、「永禄の変」を境にその後、信長に仕えるようになったと仮定して話を進める事としたい。

生間兼長はなぜ信長に仕える事が出来たのか

これは推測でしかないが、織田信長の味の好みがこのエピソードのように三流の味付けであるとすれば、生間兼長が料理の味によって信長に仕える事は難しかっただろう。将軍家に仕えていた生間兼長の味付けは、坪内以上に上品で京風の薄味の味付けであったと考えられるからである。よって生間兼長の料理のテイスト、あるいは料理における実力や、都で賞賛されていた料理のスタンダードな味付けだけでは、信長に仕える事は出来なかっただろう。

またこのエピソードで坪内某は、市原五右衛門の推挙によって、信長の試験を受けることが許され、その結果として賄役に任じられるようになっている。つまり味だけでなく、信長の家臣による何らかの推挙が無ければ、料理人として信長に仕えることは難しかったであろうことが推測できる。

ここで生間兼長に話を戻すと、坪内某のエピソードが事実かどうかはさておき、この時代の背景として、同様の要素が信長の料理人として仕えるにおいて検討されたであろうことは間違いない。つまり、生間兼長が織田信長に仕えていたのは、信長の味を好みがどうこうという訳ではなく、やはりその料理人を召し抱えるだけの必然性を持ちうるような強い推挙が、高位にある信長の家臣から行われた可能性である。つまり明智光秀という存在があり、それによって生間兼長は信長に仕える事が出来たと考えられるのではないだろうか。その根拠をあげるとするならば、明智光秀が司ることになっていた「天正十年家康饗応」に、生間兼長が関与し奉仕していることにこそある。

もしかすると生間兼長は京に在中しており、実質的には明智光秀の元に居たとも考えられる。京に信長が上京した際に、料理役として勤めることで、明智光秀の君主である信長に仕えていたとしていたのかもしれない。そうなると「天正十年家康饗応」には、明智光秀の司る料理のために、生間兼長も京から安土に赴いたとも考えられる。有職故実に基づいた饗応ということになれば、なおさら生間兼長のような人材は必要とされたに違いない。

坪内のエピソードを踏まえるならば、信長は生間兼長の携わっていたような有職故実に基づいた料理を、日常の生活・食事を取る場所であった安土では必要としなかっただろう。
このような推測を行うと、京という場所にあって、明智光秀と生間兼長の料理を介した関係性がより強く意識されるようになってくる。つまり京という場所がクローズアップされると、将軍家への饗応料理（御成）として発達した本膳料理の有職故実に通じていた、明智光秀（進士藤延）と、生間兼長の結びつきが強く感じられるようになる。

いずれにしても、料理という観点から歴史をみると、やはり「永禄の変」で消滅したように思える進士流の影が、明智光秀には感じられてしまう。織田信長が、明智光秀に「天正十年家康饗応」を命じたという事は、明智＝進士のひとつのヒントでもあり、信長がその饗応役から明智光秀を解任したことには、もっと重要な要素が含まれているのではないだろうか。例えば、解任について明智光秀は、単に料理手配を解任され自分の顔を潰されたというよりは、さらに大きなものとして進士流としての氏族の矜

持を潰されたと考えることもできる。また信長が御成を行わせようとしたという事であれば、より一層、進士流として将軍家の御成を司ってきた家系に生まれた明智光秀（進士藤延）にとっては合点がいかない事であっただろう。

補足

信長が光秀を解任した理由は推測するしかないが、それが料理において不満があったからといことになれば、坪内のエピソードには何らかの真実（信長は有職故実に基づいた料理を理解できなかった）が存在し、それを核として、こうしたエピソードが成立したとも考えられる。

信長の叱責や、饗応役の解任が「本能寺の変」に繋がったとする説には、短絡的で個人的な怨念といった衝動的なものしか感じられない。しかしその解任を、明智光秀が、料理の有職故実のプロフェッショナルである進士としての氏族の否定（将軍家と進士家の血を引く明智光慶の否定）と捉えたのであれば、光秀が信長を討とうした大義は、理性的で考え抜かれたものであったと理解できる。

またこれは拡大解釈し過ぎであるかもしれないが、もしかすると明智光秀は信長に対する攻撃を、京において「永禄の変」で死亡した、父、進士晴舎、および将軍足利義輝の為の、将軍家を翻弄して来た新興権力者たちに対するリベンジであったと捉えていたのかもしれない。それは自分自身の為でもあり、またそれ以上に光慶の為でもあったとも考えられる。そうした意味において「永禄の変」と「本能寺の変」とはどこか相関した関係が明智光秀のなかにはあったのではないかと感じられる。

こうした拡大解釈も、明智光秀が進士氏であった、さらに明智光秀が、進士藤延であるという事でなければ成立し得ぬのであるが、それでもなおかつ、ここで取り上げた料理に関係した様々な断片は、明智光秀＝進士氏であることをやはり示唆しているように思われてならないのである。

参考記事

美味求真　：　生間流 http://bimikyushin.com/chapter_3/03_ref/ikama.htm

：　庖丁人 http://bimikyushin.com/chapter_4/04_ref/houcyo.html

五郎左衛門尉兼重　　羨久三年二月八日卒
左衛門尉　兼俊　　建長二年五月六日卒
九郎左衛門尉兼房　　文永元年四月廿四日卒
九郎左衛門尉兼定　　嘉元二年七月廿日卒
二郎左衛門尉兼高　　正和五年二月九日卒
右衛門尉　兼泰　　康永三年九月十九日卒
右衛門尉　兼宗　　延久五年五月二日卒
足利家ニ仕ヘ大禮ノ式ヲ掌ドル
出雲守　兼季　　至徳元年八月十三日卒
出雲守　兼隆　　正長元年五月八日卒
足利家大禮ノ節式庖丁ヲ奉勤シ三ツ星ノ紋所ヲ賜ロ

将軍義滿公御遊ノ時台命ニヨリ鮟鱇釣庖丁ヲ奉仕シ
絹及太刀一振ヲ賜フ又藤花五形花ヲ剥キ賞ヲ賜フ
民部少輔　兼忠　　永享八年九月廿日卒
出雲守　兼蔭　　文明十七年三月十七日卒
民部少輔　兼信　　天文七年三月十一日卒
民部少輔　宗仁　　弘治三年七月九日卒
出雲守　宗長　　天正九年六月八日卒
三郎左衛門尉兼長　　慶長十七年七月十一日卒
永禄四年将軍義輝公ニ好屋形ヘ御成ノ節饗禮ヲ奉勤
ス其後織田右府公ニ仕フ
天正十年五月安土城ニ於テ上様信長公三河守徳川家康公御

申シノ節饗禮ヲ奉仕ス其後豊臣秀吉公ニ仕フ
天正十六年四月十四日秀吉公聚楽城ヘ御成ノ節饗ノ
大禮ヲ奉仕ス台命ニ依リ鮟鱇釣庖丁ヲ奉勤シ御太刀
一振ヲ賜フ　主上聚楽城ヘ行幸ノ節秀吉公ノ特命
ニ依リ　主上ノ御膳事ヲ掌ドル其後秀吉公ヨリ
陽光院皇子八條（後ヲ桂ト稱ラル）宮一品式部卿智仁親王ニ附屬
セラル爾後代々同宮家ニ扈從シ毎年正月三日御簾外
ニ於テ式庖丁ヲ奉仕ス其都度御太刀一振ヲ賜フ
又左衛門尉　兼秀　明暦三年正月八日卒
天正十六年四月十四日秀吉公聚楽城ヘ御成ノ節父兼
長ト共ニ召出サレ白銀及御帷子御單服ヲ賜フ

慶長二年四月秀吉公ノ御媒妁ニテ蒲生氏郷ノ男秀行
家康公ノ姫君ト御祝言ノ節式法及饗禮ヲ掌ドル
八條宮智仁親王ノ御命ニヨリ鮟鱇釣庖丁ヲ奉仕ス其
賞トシテ御太刀一振ト布ヲ賜フ
慶長十二年朝鮮信使來朝ノ砌徳川家ノ命ニヨリ盛饌
調進ス
元和三年將軍秀忠公加賀筑前殿ヘ御成ノ節ノ大禮ヲ
勤ム
同七年六月十一日江府ノ女君（秀忠公ノ女東福門院ノ御事）御入内御
大禮ノ饗饌ヲ二條城ニ於テ奉仕ス
出雲守　正秀　天和元年十一月十二日卒